



## 談話型による第2次岡崎敬語調査3場面分析の試み

著者	松田 謙次郎
著者別名	MATSUDA Kenjiro
雑誌名	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス
巻	12
ページ	13-19
発行年	2009-03-21
URL	<a href="http://doi.org/10.14946/00001499">http://doi.org/10.14946/00001499</a>



## 談話型による第2次岡崎敬語調査3場面分析の試み\*

松田謙次郎

---

### Discourse Pattern and the Okazaki Honorific Survey II: A Reanalysis of Three Situations

MATSUDA Kenjiro

#### Abstract

This is an interim report of an exploratory analysis of the response patterns to three questions from the Okazaki Honorific Survey II (conducted by the National Language Research Institute in 1972 (国立国語研究所, 1983). Using the modified version of discourse pattern by Kumagai and Shinozaki (2006), we found that (1) when asked to complain to the shopkeeper about the incorrect sum of change, subjects rarely make an explicit request to that effect, (2) there exists weak complementarity between an initial move and explanation of the situation in the same in the change-complaint question, and (3) there is an implicational tendency whereby those using the initial move in a given situation are more likely to use it in other situations as well.

熊谷・篠崎 (2006) を改変したモデルを使って国立国語研究所による第2次岡崎敬語調査の各場面に対する回答を機能面から分割し、各場面内・異なる場面間で浮かび上がる規則性を探索的に調査した。熊谷・篠崎 (2006) は6つの「コミュニケーション機能」、およびそれぞれの機能に場面に応じた下位分類を設けたモデルを提案した。これを改変したモデルを立て、機能的単位の組み合わせを「談話型」と呼ぶこととした。各場面データ 396 件すべてについて、前述の枠組みにしたがって談話型の集計を行った結果、(1) おつり確認場面における「再確認要求」、(2) おつり確認場面における「きりだし」と「状況説明」の弱い相補性、(3) 「きりだし」の通場面的傾向、の3パターンが浮かび上がった。

---

\*本稿は、2008 年 9 月 14 日に愛知大学で開催された、第 22 回社会言語科学学会大会ワークショップ「同一データの複眼的分析からわかること：岡崎敬語調査3場面の再分析」で口頭発表したものに大幅に加筆・修正を加えたものである。ワークショップのメンバー、および当日コメントを頂いた参加者諸氏に謝意を表したい。本研究は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（A）「敬語と敬語意識の半世紀：愛知県岡崎市における経年調査」（課題番号 19202014 研究代表者：杉戸清樹）の一環として行われたものである。

## 1. はじめに

岡崎敬語調査の各場面に対する回答をひとつの談話と見なして機能面から部分に分割し、各場面内で、また異なる場面間で比較したらどのような知見が得られ、第三次岡崎敬語調査の分析にどのように生かせるであろうか。本発表ではこのような問題意識のもと、岡崎敬語調査とはほぼ同内容の調査票を用いて全国4都市で行った調査結果を、やはり機能面に注目して分析した熊谷・篠崎(2006)を改変したモデルにより、第二次調査(国立国語研究所, 1983)における3場面の分析を行った結果を報告する。

## 2. 分析の枠組み: 「機能的要素」と「談話型」

### 2.1 出発点: 熊谷・篠崎(2006)

まず本発表の中心となる「談話型」という概念を説明しておく<sup>1</sup>。岡崎敬語調査の質問は、回答者に「往診の依頼」「おつりの確認」といったある種の言語行動をする場合の言い方を問うている。その回答は、一見まちまちなようであり、回答の部分部分が果たしている機能に注目すると、いくつかの小単位(機能的要素)に分割できる。このことを最初に看破した熊谷・篠崎(2006)は、6つの大项目的な「コミュニケーション機能」(きりだし、状況説明、効果的補強、行動の促し、対人配慮、その他)、およびそれぞれの機能に場面に応じた1~4つの下位分類を設けたモデルを提案した。こうした機能的要素の組み合わせのパターンが「談話型」である。

機能的要素と談話型という概念は、岡崎敬語調査構想当初は想定されていなかったものである。しかし熊谷・篠崎(2006)はこれらの概念の導入により、談話型の世代差などの知見を明らかにしており、今後の岡崎データの分析枠組みとして有望なものであるものと思われる。

### 2.2 熊谷・篠崎(2006)の改変

熊谷・篠崎(2006)の着想は非常に有用であるが、今回は試みにそれを改変して使用した。改変点は、(1)熊谷・篠崎(2006)の二段構造を解消し、「効果的補強」と「対人配慮」「その他」を「補足」としてまとめ直した、(2)「行動の促し」を「依頼」「確認」「再確認要求」に分解した、(3)釣り銭確認場面にだけ「指摘」「確認」「再確認依頼」という機能的要素を立てた、という3点である。「きりだし」「状況説明」の内容はほぼ熊谷・篠崎(2006)と同様である。「指摘」は、釣り銭の誤りを指摘する機能的要素、「確認」は自分が買った物の値段、また払った額を確認する部分、そして「再確認依頼」は、釣り銭の再確認を要求する部分である。今回使用した枠組みを以下に示す:

表1にあるような要素の組み合わせ一つ一つがこの発表で言う「談話型」となる。

<sup>1</sup>「談話型」という用語と概念は、沖(1995)が初出と思われるが、ここでは岡崎データとの親和性も考慮して、熊谷・篠崎(2006)の枠組みに依拠している。

表 1: 本研究の枠組み

コミュニケーション 機能	機能的要素		
	荷物預け	医者	おつり
きりだし	スミマセン; オソレ イリマスガ	センセー スミマセ ン; アノ ヤブン スミ マセンケド	オバサン; モシ
状況説明			チョット イマ カッタ ンダケドモ; イマ オ ツリ イタダイタンデ スケドモ
理由	チョット ヨソエ マワ リマスカラ; チョット マワリミチ シテ ホ カデ カイモノ スル カラ	キンジョノ コドモ ガ キュービョーデス ノデ; イマ キュービ ョーデ コマッテルン デスケド	
確認			コノ シナモンワ オ イクラデスカ; チョッ ト オイクラデシタカ ネ
指摘			チョット オツリガ オカシイ; チョット モー イッペン オツ リオ アラタメテ ク ダサイ
依頼	コノ ニモツ チョット オネガイ シマス; チ ョット アズカットイ テ チョーダイ	オーシン ネガエマセ ンデショーカ; スグ キテ イタダケナイデ ショーカ	オツリン カンジョー オ モー イチド ヤッ テイタダケマセンカ; イッペン オシラベク ダサイ
補足	スグ カエッテクルカ ラ; オテスーデスケ ド	センセー スミマセ ン; アノ ヤブン スミ マセンケド	オバサン; モシ
再確認要求			モー イチド タシカ メテ クダサイ

### 3. データ・方法論

本稿で使用するデータは、1972年に実施された第2次岡崎敬語調査調査（面接調査）のうち、「荷物預け」「医者」「おつり」の3場面の回答である。各場面の質問文は以下の通りである。

- (1) 【荷物預け】これはあなたの買いつけの店です。この店で買物をしましたが、ちょっとよそへ廻るので、このふろしき包をあずかっというてもらう場合、あなたは店のこの人に、何と言って頼みますか。
- (2) 【医者】あなたの家の近所の人が急病になりました。あなたが頼まれて、お医者さんの家に行くと、お医者さんが玄関へ出て来ました。このお医者さんに、すぐ来てもらうのには何と言って頼みますか。
- (3) 【おつり】この店はあなたの買いつけの店です。あなたが、この店で買いものをして、おつり（かえし）をもらったら、おつりが足りません。あなたは何と言いますか。

データセットには回答者一人一人に付けられる被調査者番号、性、年齢、学歴、3段階評価による反応文の丁寧さに加えて、実際に被調査者が回答した反応文が、カタカナ表記で入力されている。学歴は、L/M/Hの3段階で、Lは新制中学校／高等小学校卒業相当以下、Mは旧制中学・高等女学校・新制高校卒業相当、Hは旧制高校・短大卒業相当以上を指す。丁寧さの3段階は、第一次調査から導入されている野元菊男による判定であり、その方法の詳細については国立国語研究所(1957)を参照されたい。

たとえば医者場面での被調査者番号18番の回答者の回答であれば、データは以下のようになる：

- (4) 18 F 39 M 1 スグ キテ イタダケナイデショーカ

被調査者数は400名であるが、おつり場面に3件、荷物預け場面に1件の「回答なし(NR)」を含むので、これらをすべて除外し、最終的に396件が分析対象となった。これらについて表1の枠組みに従って談話型をコードし、集計を行った。

なお談話型の算出に当たっては、「きりだし」以外の要素の順番は無視している。「きりだし」については、その機能的性格から、回答の初頭部分として認定している（ちなみに「チョット」は後続部分の修飾との曖昧性が解決できないので、「きりだし」とは見なしていない）。また、各機能的要素が離散的に出現する場合も、一つの単位として認定している。

### 4. 分析

ここでは各場面における談話型の分布を探索的に検討した結果浮かび上がってきた、3つの興味深いパターンについて述べてみたい。

#### 4.1 おつり確認場面における「再確認要求」

おつり確認場面では、話者は店員にもう一度おつりを確かめてもらうよう要求することが求められている。よって、単純に考えれば多くの話者は次の(1)(2)のような「再確認要求」という機能的要素を含む談話型を駆使していると予測できる（下線部は「再確認要求」部分）：

(5) オツリガ、タリナイヨーデスカラ、モー イチドタシカメテ クダサイ

(6) モシモシ、イマノ カイモノオ シマシタ コノ オツリガチョット コレデワ タリマ  
センガ イッペン オシラベ クダサイ

しかし、実際はその逆であり、データではほぼ3/4の話者は明示的に「再確認要求」を発話していない。

表2: おつり確認場面における「再確認要求」要素の頻度

再確認要求あり	再確認要求なし	総計
103	293	396

では「再確認要求」機能を持つ要素を使わずに、話者はどのようにしてそのタスクを果たしているのだろうか。「再確認要求なし」の談話型を見ると、(3)のような「指摘」のみが136件、(4)のような「きりだし」＋「指摘」が108件で、「再確認要求なし」の実に83%が以下の(3)～(4)のような発話で占められていることが分かる。つまり、おつり確認という目的を達成するに当たって、3/4の話者は「指摘」「確認」といった機能的要素の持つ語用論的力に依存して当初の目的を達成しているわけである。

(7) オカネガ チョット タラナイミタイデスケドモー

(8) オバチャン チョット オツリ オカシイデ

医者と荷物預けの場面で「再確認要求」に相当する「依頼」抜き談話型はそれぞれ4件と1件であり、「おつり確認」というタスクの特殊性が見て取れる。金銭が絡む「再確認要求」を明示的に発話することを避けようとする心理が働くものと解釈できよう。同様な知見を熊谷・篠崎(2006)も報告しており、こうした方略が非常に一般的な傾向であることが窺える。

#### 4.2 おつり確認場面における「きりだし」と「状況説明」の弱い相補性

おつり確認場面ではまた、「きりだし」と「状況説明」が弱い相補性を持つ傾向がある。言い換えると、「きりだし」が使われる回答では「状況説明」が使われない傾向があり、逆も真であるということである（表3）。

この分布から、「きりだし」なしの回答では「きりだし」の後に続くことの多い「状況説明」が「きりだし」の機能を担っていることが窺える。こうした要素間の相補性は、探索を続けるとさらに見つかる可能性が高い。

表 3: おつり確認場面における「きりだし」と「状況説明」

	きりだしあり	きりだしなし
状況説明あり	11	36
状況説明なし	141	208

#### 4.3 「きりだし」の通場面的傾向

「きりだし」とは、働きかける相手への呼びかけである。こうした呼びかけを言うのには、個人的傾向はあるのだろうか。もしあるとすれば、場面を通じて「きりだし」を使うはずである。これを検討するために、場面 X で「きりだし」を使う回答者のどれほどが場面 Y で「きりだし」を使うかを表にした（表 3）：

表 4: 3 場面間の「きりだし」の相関

	荷物	医者	おつり
荷物	—	70% (125/177)	70%(110/156)
医者	50% (125/250)	—	58%(90/153)
おつり	44% (110/250)	51% (90/177)	—

表で見るように、[荷物→おつり]を除いては、すべての組み合わせで 50%以上の確率でやはり「きりだし」を使っている。ここからして、「きりだし」を使うか否かには個人的な傾向があることが推察できる。

## 5. おわりに

今回の報告では、話者の社会的属性を無視して、純粹に談話型とその分布のみに基づいて論を進めた。それは、談話型のみを見ても浮かび上がる分布を探索するのが先決だと考えたからである。

今後の方向性としては、まず機能的要素単位での敬意の数量化がある。試みに、各機能的要素の敬語の段階付けと、岡崎調査報告書で用いられた反応文全体に対する段階付けとの相関を荷物場面で計算したところ、「依頼」部分で 0.854 という結果が出ている（Spearman の順位相関係数）。

2 点目には、社会的属性を取り入れた分析がある。熊谷・篠崎 (2006) が示したように、談話構造と社会的属性の両者を組み入れた分析は、我々に多くのことを学ばせてくれる肥沃な大地を提供してくれるはずである。

## 参考文献

国立国語研究所 (1957). 『敬語と敬語意識 (国立国語研究所報告 11)』. 東京：秀英出版.

国立国語研究所 (1983). 『敬語と敬語意識—岡崎における 20 年前との比較—(国立国語研究所報告 77)』. 東京：三省堂.

熊谷智子・篠崎晃一 (2006). 依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差. 『言語行動における「配慮」の諸相 (国立国語研究所報告 123)』, pp. 19–54. 東京：くろしお出版.

沖裕子 (1995). 談話型から見た喜びの表現—結婚のあいさつの地域差より—. 『日本語学』, 12 (1), 44–52.

**Author's E-mail Address:** kenjiro@shoin.ac.jp

**Author's web site:** <http://sils.shoin.ac.jp/~kenjiro/>